

アキとカナ、  
サンタになる

「残念なお知らせがある……」

深刻な顔をして、アキちゃんが子供部屋に戻ってきた。

「コワ、何なん」

私はアキちゃんの顔を覗きこんだ。

アキちゃんは肩を落として言った。

「サンタさんの正体、お母ちゃんやったわ……」

あー、やっぱり、そーやったんかあ……。

うすうす、そーかなーとは思ってたんやけどな。

いや、でも私たちもう小学三年生やん？ そろそろ現実見なあかんと思うわ。

アキちゃんは昼間、お母ちゃんが「サンタクロスからのお手紙」を書きかけたままコタツにつぶして眠ってしまったところを見つけてしまったらしい。

シヨックを受けたアキちゃんは、お母ちゃんがお風呂に入っている間に、引き出しを幾つかこっそりのぞいたそうさ。すると、やっぱりサンタクロスからの手紙はそこにあったのだった。

「何て書いてあったん」

「いつも良い子の双子ちゃん達へ。いつまでも家族仲良くね、メリークリスマス、や」

「いつも通りやな」

お母ちゃんは筆跡を変えるために左手でペンを握っていたそうさ。泣かせるやん。ちなみに手紙と一緒に見つけたプレゼントは、包装紙からして好きなお店のお洋服。多分お揃い。これは嬉しい。

「知ってしまったとお母ちゃんに正直に言う方がええかなあ……なあ、カナちゃん、あんたはどう思う」

アキちゃんは眉を八の字にしている。めっちゃ落ち込んでる。

まあ、お互いにいずればバレることやし、あとで「し、知ってたんか」となるよりは、どうせなら楽しくバラしていかへん？

私はとっさに思いついたことをつぶやく。

「私らもサンタさんになるか……」

「どーゆうこと、カナちゃん」

「私ら、ずーっとお母ちゃんにはお世話になってるやん？」

「いや、ほんまに」

「それやのに貰ってばかりで、お手伝いもろくにせえへんやん？ そのうえ、今の今までサンタクロースがほんまにおると思い込んで、お母ちゃんにはお礼も言っつてなかったやん？」

喋ってたら、なんか自分でヒートアップしてきた。

「うん、そやな、反省してる」

「サンタクロースじゃなくて親が枕元に置いてるんやでってレナちゃんが言っつたのに、そんなん嘘や！ っつて言い張っつてクラスで多数決とっつて戦争起こしたくらい、私らサンタさん信じようとしてきたやん。そこまで信じさせたお母ちゃんは、スゴイよな」

「せやな、私らもほんま、ピュアやったな」

「そやろ。私たちを素直に育ててくれて有難うって、お母ちゃんにお礼しょ」

「カナちゃん……、アンタええ子や！」

「アキちゃんもやで！」

私たちはかたく握手をした。

レナちゃんには今度会ったら謝っとこ。

クリスマスイブがやってきた。さあ、いよいよ今晚。

アキちゃんと私はツリーを全力でキラッキラに飾り、イブのディナーにクリスマスツプとい鳥の丸焼きを食べた。そして明日の本ちゃんクリスマスのためのケーキを三人で焼いて、チョコのクリームを塗りたくって、お菓子でできたサンタクロースとトナカイをのせた。

ここまではいつもと一緒！

お母ちゃんはニコニコとお化粧水をはたいて、寝支度をしている。これは寝るフリ。寝巻に着替えてコタツで温まっている私たちに、お母ちゃんが話しかけてくる。

「サンタさん、今年は何くれるんやろなあ！ 楽しみやなあ」

お母ちゃん、私ら知ってるんやで、お手紙と一緒に洋服用意してくれてるの。ありが

とう、めっちゃ感謝してる。

「うん、めっちゃ楽しみ！もう今年はサンタさん待たんと、はよ寝るわ！どうせいつも起きてられへんねんもん！なあ、アキちゃん！」

「うん、ほんまほんま！そしたら、お母ちゃんおやすみ！」

私たちはあくびをしているフリをして、子供部屋に戻る。このまま子役になれそうな気がするくらい、良い感じやで。

さー、やるぞお！

クローゼットに隠していた小道具を、静かに音を立てないように取り出して、アキちゃんと並んでお着替えをする。念のためアキちゃんに小声でささやく。「そーとやで、そーと。寝てるって思わせなあかんねんから」「わかってるって！」「声大きい！」

アキちゃんは赤いワンピースと手作りのサンタ帽をかぶった。なかなか可愛いサンタコスプレ。さすが私のカタワレ。いっぽう私は手作りのトナカイの赤い鼻とツノをゴム紐でつけて、茶色いお洋服を着る。茶色のトーンが上下で合っていないし、ラクダみたいでダサいけど、しゃあない。ジャンケンで負けてしまったんやから。

そして猫のノンちゃんも一緒に部屋に入ってきていたので、くつろいできるところ悪いけど、しっぽの先に赤いリボンをつけてやった。

うん、可愛い可愛い。シー！ここで大人しくしとくんやで。

よし、プレゼントも完璧に準備した。

静かに眠ったフリをして、お布団の上に座っておいて、お母ちゃんが子供部屋を覗くのを待つ！ドアを開けて入ってきたら、「メリークリスマス！」って言って私たちからプレゼントを渡す！

さあ、お母ちゃん！

今晚はアキ・アンド・カナがサンタクローズやで！

「カナちゃん…カナちゃん…」

ムニヤムニヤ……遠くで誰かが呼んでいる……  
ゆさゆさ揺さぶられてハッと目を覚ました。

「カナちゃんカナちゃん！ 失敗や、してやられた！ サンタ計画は、みごと失敗です！」  
アキちゃんはケタケタ笑っている。

しまった……いつも通りサンタクロースを待っている間に、二人して眠りこけてしまったのか！ サンタの帽子もトナカイの鼻もすっかり取れて転がっている。

私たちのおでこにはそれぞれ、紙が貼られてあった。アキちゃんは先に目覚めて紙を剥がして大笑いしていたらしい。

《サンタクロース参上！》

慌ててお母ちゃんの元へ走っていくと、お母ちゃんはリビングで、お父ちゃんのカッコいい写真をひたすら貼りまくった三十ページにわたる写真集と、キラキラに可愛いハンカチと、心を込めて書いた長文の手紙の前に、顔を手でおおってオイオイ泣いている。

「あ、お母ちゃん、泣いたらあかん」

「そやで、泣かすために贈ったんちゃうで、わろて！」  
私たちは焦ってお母ちゃんの肩を揺さぶった。

お母ちゃん？

お母ちゃんは手をぼんと離した。

「うっそー、嘘泣きでした〜」

そうや、お母ちゃんはこういう人や。手紙返して。

かくかくしかじか、計画を白状した私たちにお母ちゃんは言った。

「あんな、お母さんな、サンタクロースの指示を受けてな、代わりにお手紙書いてんねん、だからな、サンタはおるんやで」

こりへんなあ。

「ほんでな、今までのお礼を兼ねてな、サンタから特別なボーナスもらってん」

ボーナス？ 私たちは顔を見合わせた。アキとカナ、おんなじ顔できよとん。

「お父ちゃん、帰国が早まりました！ 見事にお仕事を仕上げて、地球の裏側から帰ってきます！ なんならもう帰ってきてます！」

「お父ちゃん、サンタやで！ ただいまあ！」

ばあんとリビングのドアが開いて、部屋着にサンタ帽をかぶったお父ちゃんがどかどか出てきた！ 私たちはあっけにとられた。

「はあ？ お父ちゃん、いつから隠れとったん？ いつ帰ってきたん？ でもとりあえず、嬉しいから抱きついで！」

アキちゃんと私は同時にさげんだ。

「サンタクロスはやっぱりおるな！」

日に焼けてますますカッコよくなったお父ちゃんと、やっぱりちよっと泣いてるお母ちゃんと、アキちゃんと私。あ、ノンちゃんも出てきた。こっちおいで！

皆でメリークリスマス！